

〈経営研究 第10巻 第3号 平成9年2月〉

ネットワーク世界への夢

謝 為 集

この前、新聞にはこんな記事があった。東京のある外資系会社で「パソコン」と「PHS（簡易型携帯電話）」、「ポケットベル」を社員の一人一人に持たせ、電子メディアを徹底的に活用することによって、個人用の机を撤廃し、役員室を始め、すべて共用テーブルに変えた。そのため、膨大な紙の山が消え、会議時間が短くなり、売り上げが倍増したという。まさに、「オフィス革命」を起こしている（朝日新聞夕刊10月12日付）。パソコンなどの進歩はもうここまで来ていると、感心しながらも、あれやこれやと考えた。

このところ、中国では相次いで役人たちの不正が摘発され、「国のため」、「人民のため」という看板を高く掲げて、うまいことを言った連中の化けの皮が剥がされると、高級官僚たちがベールのようなものに包まれ、社会の監督の及ばないところに生きているという真相を知らされた。それにあきれたおやじはある日感激した口ぶりで言う。「世の中の役人たちの不正を無くす日はおそらくコンピューターの普及によって、世に起きたすべてのことがありのまま、人々に伝わる時にならないとだめなんだろう。我々が求めている人類平等の共産主義もそれによって実現するだろう」と。おやじの描いた楽園は科学の高度の発達によって、コンピューターがいたるところに利用され、仕事も楽になり、貧富の差もなく、人類はそれぞれ自分に与えられた仕事をまじめにやり遂げる世界らしい。その時代、役人たちにはもう何の特権もなく、国などの管理もコンピューターのネットワークのおかげで、あるシステ

ムを操作するように、簡単なものとなり、国家のリーダーたちの行動もすべて人々の監督のもとに置かれ、不正を働こうとするものがいれば、直ちにばれてしまうというパラダイスである。こんな世界はどれほど先のことか、想像もつかないぐらいである。

このたび二年半ぶりに日本に参り、たまたま先の国会の衆議院選挙に出会い、連日町は候補者の方々の票集めの活動で沸き立っていた。新聞はもちろん、テレビもNHKをはじめ、民放にまで候補者の皆様の奮闘ぶり。まさにこの時代の一大風物である。マスコミというネットワークは政治から生活までわれわれに大きな影響を与えている。

日本は日本で、コンピューター大国のアメリカでも大統領選の最中である。民主党の現任大統領クリントンさんと、共和党候補のドール氏とはテレビで従来の討論を行うという形だけではなく、インターネットを使って、支持者を得ようと努力していた。そういった最先端の技術が国の政治に活用され、政治家は支持者を得る同時に、選民たちにいろいろなことを約束してしまう。当選できたものは、当然公約を実行するようにと、支持者たちに要求される。いわば大衆の監視下に置かれた形になる。それは人々にとってたいへん良いことに違いないが、政治家にとっては、公約が自分の施行しようとするものと矛盾した場合、さぞ具合の悪いことであろう。だが、我々人類はすでに21世紀に入ろうとするところに来ている。役人たちはすべてを自分に都合のよいように動かせなくなっている。大衆の目は、テレビや新聞などを通して、ますます鋭くなり、今は更にコンピューターやネットワークのような強力な武器が加わり、これまで以上に物事をはっきり見えるようになった。悪事をしたものはいったんばれると、よほどのことが起こらない限り、再起することが難しい。先の韓国前大統領の審判、二人の前大統領が被告となり、「さらし者」となったことは、政治家たちにいくらかは薬になると思う。

政治にばかりではなく、テレビなどによって、われわれは身の回りに起きていることが、あっという間にキャッチでき、カメラを通してではあるが、自分の目で確かめられる。今年の日本シリーズ最後の戦い、四回の表、巨人

が1死一、三塁。オリックス選手のみごとな捕球に、審判がワンバウンドと判定され、三塁走者が生還という生々しい映像が人々の印象にのこり、もしその日の試合は違った結果となれば、おそらく、一生の話題になるに違いない。いままで、スポーツ競技などに見られる誤審や八百長も、電子技術の進歩によって、だんだん減っていくであろう。

こういったところにマスコミのネットワークが大いに役立っているが、上記の「オフィス革命」のように、今日の経済活動の隅々にまでコンピューターのネットワークが革命を起こしている。生産第一線ではコンピューターの導入によって、能率が上がり、合理化がどんどん進み、従来の生産方式が変わりつつある。また、物流の世界でも今まで考えられない倉庫いらずの現象も当たり前のようなものになっている。もっとも、われわれの日常生活にまで各種のネットが入ろうとしている。通信販売といえ、けっこう現代的なものといえよう。他の途上国ではどういう状態にあるか知らないが、中国ではそれがごく最近になって見られる流通形式であり、まだまだ人々になじまない段階にある。一方、アメリカなどではこのところコンピューターのネットを通じて行われようとしている。カタログはもちろんネットから送ってもらい、おそらく今後は平面図ではなく、立体の図面が見られるようになるであろう。電話回線を通して、注文ばかりか、支払いもネットワークのおかげで銀行へ行かずにすむらしい。そうなれば、買い物は外に出掛けずに、家で届けてくれるのを待てばいいわけである。いったい、われわれの生活がどう変わっていくのであろう。

今後、世界のあちこちで起きる事件などはテレビを通してではなく、おそらくコンピューターのネットワークから、時にはマスコミよりも速くキャッチでき、その真相もありのまま伝わってくるであろう。中国ではパソコンが一般の家庭に入るのはここ三、四年のことであり、インターネットという言葉が人々に知られるのも、つい最近のことであるが、いろいろなコンピューターのネットワークの普及は思う以上に進んでいる。この前インターネットの長所を紹介する一例として、北京の某大学での出来事が話題に取り上げら

れた。在学中のある大学生は突然怪病にかかり、病院では治療どころかその病名の確定さえできず、すでに危篤状態になっている。それを心配した同級生たちは一筋の希望をつないで、インターネットにメッセージを送り、病状を説明した上、助けを求めた。すると、すぐさま、世界各地から電子メールが殺到し、中には病因を究明しようとしたものもあれば、お見舞いのものもある。ある医者からのメールにははっきりとそれはある重金属による中毒症状であると指摘する同時に、治療法まで紹介してあった。それを読んで、同級生たちは化学実験でそれを使ったことを思いだし、さっそく病院に知らせ、あの学生の命を救ったという。これはまさにインターネットでなければ解決しにくい例である。また、中国ではこのところ、漢方医学の研究にコンピューターを導入しようという話が耳にする。それは人間国宝（中国ではこんな言い方はない）のような存在である漢方医師らの診断書や処方箋などを集め、ソフト化しようという試みである。それが実現できれば患者の病状などをコンピューターに打ち込んで、直ちに「名医」たちの診断が受けられ、処方箋まで出してくれるという。もしそれが実用化となり、さらにネットに繋いだら、中国のような広い国のいたるところに「名医」が現れ、どんなへんぴなところに住んでいても、どんな人でもその治療が受けられるようになる。それは普通の人々に、特に医療条件に恵まれない人々にとってはなんという良い話であろう。

おやじの夢を聞かされて以来、コンピューターやインターネットに関心を持ち、それらに関する報道などを集めるようになった。だが、集めれば集めるほど、不安になってならない。つまり、すべてのものにプラスの面があれば、かならずマイナスの面も持っているように、このコンピューター、ネットワークの世界にも暗い面を持っているとわかった。今度、日本に来て、コンピューター先進国の一つである日本で起きたいろいろなことから教えられたものが多い。

まず、先の衆議院選挙である。選挙活動に全力を挙げた各党派、及び立候補した人々が最大限にマスコミを利用していることが目につく。テレビ、ラ

ジオ、新聞、それにコンピューターのネットワーク。それらのものがすべてPR活動に利用されていた。政治家にとっては目的達成のため、利用できるものをうまく利用することはあたりまえのことに決まっているらしい。だが、ここでちょっと角度を変えて考えてみよう。もし、マスコミが政治家や政党の私利私欲に利用されたらどうだろう。きっと大変なことになるに違いない。歴史をちょっと調べても分かるように、これまでの戦争の多くは、国のためとか、民族のためとかの大義名分のもとで行われていたが、その結果として、普通の人々にはなんの得もなく、彼らにあるのは苦しみに耐えながら、多大な犠牲を払うことだけである。歴史というものは書物などに書かれていないことが多い。その真実は知られないまま永遠に闇に葬られるものがある。このところ、中国と日本の間の釣魚島（尖閣諸島）の領土問題がまたマスコミに出ていた。こういうことは何年かたてば問題になり、また何年かたてば出てくる。もちろん、領土問題のようなものは簡単に解決できるものではない。だから、ほっとけば良いのだと思う。しかし、つねに時の話題となって出てくる。こんな時、必ずといっていいほど、裏で動いているものがある。こういう問題には利用の価値があるから、政治家個人、または、政治団体の利益に利用されているのが多い。でなければ、マスコミをさわがせたりする必要はない。こんな問題は専門家たちに任せて、落ち着いて、話し合いによって解決すべきものであって、国民の感情を煽ったりするようなものではない。そういうときのマスコミの動きが怖い。政治家などに翻弄されたらとんでもない局面を作り出すことができ、ちょっとした火種も、大火事になる恐れがあるからである。

政治にだけではなく、メディアが悪用されることが恐ろしい。この先の、英国の「ダイアナ妃の密会騒動」、アトランタ五輪の最中に起きた爆弾事件での容疑者についての誤報。あっと言う間に世界に広がり、いかにも本当らしく報道され、人々に信じさせようとした。だが、まもなくそれらは真実ではないと知らされ、のちに、いずれも、報道のミスといって片づけられてしまうが、誰でもその裏には新聞記者、新聞社の特ダネ欲しさが隠されている

ことが分かる。こういう無責任なやり方は当事者本人にとってどれだけ大きな迷惑になっているのであろう。場合によって、人の一生を狂わせてしまうこともある。でも、世の中はもうだいぶ変わっており、今は他人事のように、高見できるが、いつかは自分もこんな目に遭わされる。コンピュータのネットワークの広がりによって、我々の生活にいろいろな便利をもたらしている同時に、新しい手口の犯罪に狙われることもある。コンピュータのネットワークのおかげで、銀行の仕事が簡単になり、銀行の利用も便利になって、お金の出し入れがどこでもできるようになっている。こういう変化に伴って、コンピュータによる犯罪も世界中続出している。銀行内部のものによって、コンピュータを操作して、客の金を架空の口座に入れたり、また、外部のものが何らかの手段で銀行のネットに侵入し、パスワードを解読して、金を引き出したりする事件が新聞にしょっちゅう載っている。われわれのすぐ身近にもそういう犯罪が近づこうとしている。中国では今年のはじめに話題となったものがある。北京大学のある在校生が卒業を控え、アメリカ留学を希望して、インターネットを通して米某有名校に入学と奨学金の申請をした。まもなく、米大学からの返事があり、万事うまく行き、卒業することを待つだけとなった。そんなある日、米国からの電子メールが届き、それは彼女の奨学金のキャンセルを受理したとの知らせであった。もちろん、彼女には奨学金をキャンセルした覚えがなく、さっそく調べてみたら、確かに彼女がこれまで利用した大学のコンピュータから米国にメールを送ったことがわかり、身近なものによるいやがらせらしい。疑いの焦点がだんだん寮のルームメートに集まるが、容疑者は必死に否認した。事態は結局、裁判に持ち込むというところまで発展し、さすがの裁判所もそういう新しい形の犯罪にどう対処するかに悩み、なによりも証拠集めに苦勞したらしい。一審の法廷弁論はマスコミと人々の注目を集めたが、容疑者の弁舌とふてぶてしい態度は、みんなに強い印象というよりショックを与えた。一審の判決を待っている最中、双方の和解が報じられ、容疑者は犯行を認め、被害者に謝罪すると同時に相手に与えた精神面の苦痛を、金銭で賠償するという。被害者のほうは米

国の大学に事情を説明し、大学側の理解をもらい、奨学金の獲得を確認して、訴訟を取り下げたそうである。騒ぎはおさまったが、この事件が社会に投げた波紋は大きい。21世紀を迎えようとする我々にはその新しい時代に、どれだけの心構えをしているかが問われる。

日本でもこういったネットワークを利用した「いたずら」が報じられている。「アクセスギフト事件」(朝日新聞夕刊10月22日付)。パソコン通信の会員である会社員のところに、心当たりのない利用料の請求が届き、それは実在しない名前が、家族の会員として登録され、使った料金だという。こういった例は、個人のパスワードが盗まれて起きた事件だと言われているが、続発するこのようなパソコンによる犯罪に救済の手段がないらしい(朝日新聞夕刊11月12日付)。新技術が次々と開発される新しい世界を迎えた我々にはこれまで未遭遇の犯罪も近づいてきていると言えよう。

電子技術の発達によって、電話、冷蔵庫、洗濯機などの出現は、人々の生活に潤いをもたらし、ラジオ、テレビ、マルチメディア、インターネットなどは、さらに生活をカラフルに変えようとしている。だが、こういった電気製品を開発したのは人間、使うのも人間であることを忘れてはいけない。人間はそれらを開発する同時に、それらを悪用することもできる。多くのものは作られる当初、我々の生活に便利をもたらすことが目的であったが、これから先、どんなふうに使われるかを予測していないのは普通であろう。そのため、悪用されたら、そのたびに対処措置が講じられ、解決方法はずっと遅れて現れるのであろう。例えば、コンピューターの大敵であるいろいろなウイルスも、元はと言えば、生みの親はいずれもその道のプロであり、いたずら？好奇心？社会への報復？動機はともかく、その破壊による損害は確かなものである。ウイルスが現れ、その被害を受ける。そして、人々はそれを退治する方法を研究し、ソフトを開発する。また、新しいウイルスが現れ、それに対抗するソフトを開発する。こういうふうに繰り返されている。これは医学界の現状とかなり似ている。新しい病気が現れ、医学者たちは発病の原因を突き止めて、治療する手段を研究し、薬などを開発する。我々普通の人々、

また科学者も、医学者も、いつも受け身の立場に立たされており、いわばこれから先、どんな事態が待ち構えているか予測できないまま、その到来を待つしかないという状態にあり、事が起きるたびに、その対処措置を研究するといった哀れな立場である。そういう事件はもしただコンピューターにいたずらをしたり、銀行から不法に大金を引き出したりするようなもので済むなら、ターゲットにされたもの、銀行などにとっては、大変つらい思いになるが、人類全体の危機にはならない。しかし、もし前に報道された子供によるコンピューターのアメリカ軍の防御システムに進入事件のようなことがまた起き、もし最悪の事態となったら、地球の危機になりかねないであろう。なにしろ、いまは情報の世界。ありとあらゆる情報が世の中に氾濫している。中には犯罪の手口を紹介するものまで、各種のマニア誌に登載され、その気になれば誰でも簡単に真似できるという。先のアトランタ五輪の爆発事件の報道には、爆弾作りは素人でもできるとかいうようなものがあり、ショックであった。機材の調達から製造まで紹介するものは雑誌などに載っているからと言う。また、ネットを通して、銀行をはじめいろいろなコンピューターシステムに進入する方法を紹介するようなものさえあるらしい。パソコンで楽しんでいる者は、遊ぶ気持ち、いたずらの気持ちで、真似してみる気になれば、これからどんなことが起きるかまったく予測できない。

21世紀を迎えようとする我々人類はコンピューター技術などの進歩によって、政治から日常生活にまで大きな変化が見られ、いろいろなネットワークのおかげで世界もだんだん小さくなったような気がする。でも、コンピューターもネットワークも作り出したのは我々人間、それを使うのも我々人間。使い方一つによって、人類を幸せにさせることもでき、世界をとんでもない災害に導くこともできる。おやじのような、コンピューターやネットワークなど新しい技術にすばらしい夢を託した人々はこういうものの発達、改善によって、人類の明日に憧れているが、私にはむしろ未知のものへの不安と恐怖が先行する。人間と言うものは私利私欲のかたまりとも言える生物であり、あらゆるものを自分に都合がよいように利用する根性を持っているからであ

る。どんなすばらしいものでも悪に利用される恐れがある。新しい技術は優れれば優れるほど悪用されると破壊力が大きい。そのマイナスの要素をどこまで押さえられるか、心配する。「杞憂」という言葉があるが、杞の国の人が天が落ちてきたらどうしようかと心配して寝食を廃したという。私の心配も「杞憂」のようなものになってほしい。これからの世界は新しい技術によって、ネットワークなどによって、もっともっとすばらしい世界になるよう、祈っている。

参 考 資 料 朝日新聞他